



季刊

弥生の出雲王に出会える



出雲弥生の森博物館だより

IZUMO YAYOINOMORI MUSEUM

第34号

(2019年7月)



★夏季企画展

「出雲の発掘3500年史」

―江戸〜平成発見の歴史―

7月13日(土)〜9月30日(月)

今から約3500年前の1665(寛文5)年、出雲市大社町杵築東の命主社境内から銅戈と勾玉が出土しました。出雲大社の神職であった佐草自清は『寛文御造営日記』に、大社の遷宮のための石材を切り出した際「銚」と「青玉」がみつかったと記しています。これが出雲における遺跡発見の最も古い記録です。

1826(文政9)年には、出雲市今市町の大念寺において古墳の石室が発見されました。当時描かれた絵図からは、すでに失われた出土品の様子も知ることができま

す。明治・大正時代には、近代化が進むとともに、多くの遺跡が発見されます。1887(明治20)年に発見された上塩冶築山古墳からは、豊富な副葬品が出土しました。日本の古墳研究者の先駆けといわれる英国人技師W・ガウランドも島根を訪れ、古墳や出土品の調査を行いました。

第2次世界大戦後には、科学的

に歴史を解き明かそうという流れの中で、島根県内にも多くの考古学団体が結成されます。また大学や高校による発掘調査も各地で行われました。

経済成長が進むと、開発に伴う発掘調査も相次ぎ、出雲市内でも数多くの遺跡がみつかります。中でも1984(昭和59)年、荒神谷遺跡において当時の全国の出土総数を上回る358本の銅剣が出土、さらに翌年には銅鐸6個と銅矛16本が出土し、日本中に大きな衝撃を与えました。

平成に入ると、1996(平成8)年に雲南市の加茂岩倉遺跡で39個の銅鐸が出土し、出雲は青銅器大国として、再び脚光を浴びることとなります。2000(平成12)年には、出雲大社境内遺跡で三本の巨木を束ねた柱が出土しました。分析の結果、出土した柱は鎌倉時代の本殿のものと判明しましたが、伝承でしかなかった古代の高層本殿の存在が現実味を帯びる発見でした。

また近年でも、出雲市内の道路整備や斐伊川放水路の工事などに先立つ調査で、貴重な遺跡が数多くみつかっています。



発見直後の国富中村古墳

今年5月、令和という新たな時代を迎えました。時代の節目を迎えた今回の企画展では、出雲市内の遺跡発見の歴史を、発見時の記録や出土品から振り返ります。

(石橋 紘二)

「関連シンポジウム」

「雲州遺跡発見伝」

「遺跡調査のいま・むかし」

日時 9月14日(土) 13〜16時

内容

○基調報告

「出雲平野の発掘史」

「戦後から荒神谷発見まで」

講師 西尾 克己氏

「荒神谷発見以後の」

文化財保護活用について」

講師 平野 芳英氏

「出雲の近代化と遺跡発見」

―長谷川コレクションの紹介―

講師 花谷 浩

○座談会

★ギャラリー展Ⅰ

「出雲の赤―縄文・弥生時代編」
好評開催中！8月26日(月)

今回の展示は、出雲市内の縄文・弥生時代の出土品を中心に、当時の人たちが「赤」(赤色顔料)をどのように使ってきたのかを紹介し

ます。
出雲地方最古の「赤」は、縄文後期初頭(約4500年前)の五明田遺跡(飯石郡飯南町)で見つかっています。土器にはベンガラが塗られ、石臼と石杵には水銀朱が付着していました。出雲へはベンガラと水銀朱が同時に伝わり、塗料として使用されていたと推測できます。

出雲市内最古は、縄文後期中頃(約3500年前)の京田遺跡(出雲市湖陵町常楽寺)です。ベンガラや水銀朱が塗られた土器や石器が出土し、最新の分析から、水銀朱は北海道産と判定されました。
弥生後期(約1850年前)に築造された「初代出雲王」の墓、西谷3号墓(出雲市大津町)には大量の「赤」が使われました。3号墓の第4・第1埋葬の木棺内には、中国産(陝西省)の水銀朱がそれぞれ約10kgも敷かれていました。こ

れほど大量に敷かれたものは、吉備の榎築墳(丘墓)の約30kgなどが知られていますが、弥生時代の九州や近畿には例がありません。木棺内に水銀朱を入れる風習は山陰ではこの頃から始まります。また、埋葬施設の上からは石杵や330個体を超える土器が出土しています。これらにも水銀朱が塗られていました。特に、吉備の特殊土器の「赤」が水銀朱であったことは注目すべき点です。貴重な水銀朱を多量に使っている状況は、出雲王の偉力を示しています。

本展示ではさらに、弥生後期の出雲で行われた水銀朱を使った儀礼も紹介します。また、徳島県の水銀朱の採掘道具や香川県の色調整の道具も展示しています。ぜひ、縄文・弥生時代の「赤」をご覧ください。(坂本豊治)



水銀朱が塗られた西谷3号墓土器
(島根大学考古学研究室蔵)

★ギャラリー展Ⅱ

「没後180年 西山砂保
―出雲の近代医学の先駆け―(仮)」
8月28日(水)〜11月25日(月)

西山砂保は天明元(1781)年、神門郡萩原村(今の出雲市萩野町)に生まれました。砂保は、祖父や父が医学をなりわいとしたこともあり、医学の道を志します。19歳のとき、京都で漢方医学を学んだのち、和歌山の華岡青洲入門しました。青洲は世界で初めての全身麻酔手術に成功した医者で、砂保はその技術を得て、出雲に戻ります。さらに、44歳のときには長崎のシーボルトに入門して西洋医学の技術も身に付け、翌年、萩原村で医館を開業しました。砂保のもとには各地からの患者や、最新の医学を学びたい人びとが大勢訪れたと伝わっています。松江藩で最も知られた医者となった砂保は天保10(1839)年、その生涯を閉じました。

今回の展示では、没後180年を迎え、出雲が生んだ近代医学の先駆けである西山砂保の足跡を紹介します。

(高橋 周)

★スポット展

「いつまでも戦後で
ありたい2019」
8月7日(水)〜9月9日(月)

1944(昭和19)年6月、太平洋戦争の戦況悪化に伴い、政府は大都市にある国民学校について、児童の集団疎開を実施する決定をしました。同年9月、島根県は大阪市西区の学童約3000人の疎開先となり、出雲市でも1500人を超える学童を受け入れたようです。

疎開宿舎となったのは出雲市内の寺院や旅館などで、神門寺(出雲市塩冶町)は大阪市西区の高台国民学校の学童約40人を迎え入れました。

このとき教員として学童たちと生活を共にしたのが、鳥取県出身の故・岩崎希子さん。先に大阪に帰った卒業生から岩崎さんへ送られた手紙19点を、当館で保管しています。これらの中には、「空襲で家が全焼して父親が焼死した」など、大阪大空襲の惨状を綴ったものも見受けられます。

今回のスポット展では、これらの手紙をはじめとする史料を展示します。戦争の悲惨さを後世に伝える一助となれば幸いです。

(三原 一将)

★速報展

「よみがえる鰐淵寺の建造物
— 釈迦堂の修理成果から —」

好評開催中！9月30日(月)

出雲市別所町に所在する鰐淵寺は島根半島(北山)の山中にあつて、1400年もの悠久の歴史と数多くの寺宝を今に伝える天台宗の古刹です。四季折々の美しい風景が広がる境内は、戦国時代(約500年前)の姿を色濃く残しています。

2016(平成28)年3月、その歴史的価値が認められ「鰐淵寺境内」は国史跡に指定されました。境内中心部に残る9つの建造物のうち、江戸時代(17世紀)に建てられた釈迦堂と開山堂は、老朽化が著しいことから、2016(平成28)年度から2020(令和2)年度までの5か年事業で保存修理を行っています。

保存修理中の調査では、屋根を剥いだり、部材を解体したりする時に、建立年や以前の姿を示す痕跡が見つかることがあります。指定文化財の修理にあたっては、こうした調査成果をふまえて、以前の姿を探りながらよみがえらせていきます。また、使える部材は極

力残し、腐食部分のみ新材に取替え、継ぎ足すことによって文化財としての価値を維持していきま

す。今回の速報展では、2018(平成30)年度に終了した釈迦堂の保存修理の成果から、解体中に明らかになった、かつての屋根の葺き方や、建立年代を示す墨書、墓股の法輪に残る金箔など、新たな発見を中心に展示しています。

また、修理工事の解体から完成までの経過を写真によって解説するほか、境内に僧坊が多数立ち並んでいた頃の様子を江戸時代や明治時代の境内図で紹介していますので、この機会にぜひ、ご覧ください。

(大梶智徳)



金箔が残る臺股の法輪

★日本遺産

日が沈む聖地出雲の文化財
(第8回)

日本遺産「日が沈む聖地出雲」を彩る構成文化財紹介第8弾!

今回は、日御碕・宇龍地区の構成文化財を紹介します。

① 宇龍のまちなみ

『出雲国風土記』に、大型船が停泊できる良港「宇礼保浦」の名で登場する歴史ある港町、宇龍。

東西約500mの小さな港ですが、戦国時代には山陰屈指の貿易港として、さらに江戸時代には、日本海沿岸を航行した北前船の寄港地として栄え、まちには十数軒の船問屋が軒を連ねました。大正時代以降、出入りする船が大型船から小型の漁船へと変わっていきます。現在は、夕日が照らす静かな水面が美しい、閑静な港町です。

② 権現島(熊野神社)

穏やかな宇龍港の中央には権現島が浮かびます。島には日御碕神社の末社「熊野神社」が鎮座し、イザナミノミコトほか2神が祀られています。

この島を舞台に行われるのが日御碕神社の「和布刈神事」です。社伝によると、成務天皇6年(西暦



和布刈神事が行われる権現島

143年と伝わる)1月5日、一羽のウミネコが潮のしたたる和布をくわえ、日御碕神社の欄干へ3度もかけて去って行きました。これを不思議に思った神職が、その和布を神前に供えたといわれています。この故事にちなみ、現在も旧暦1月5日に権現島で神事が行われているのです。

神事では、港に連ねた船を橋として権現島へ渡った神職が、初物の和布を刈り上げます。船橋を渡る際には船歌が歌われ、水先人として地元の若者が赤い下帯姿で奉仕するのが恒例。この神事が終わるまでは、日御碕名産の和布は刈ることができないしきたりになっています。

(景山このみ)

★展示のご案内

▼夏季企画展

7月13日(土)～9月30日(月)

「出雲の発掘350年史

―江戸～平成 発見の歴史―

●ギャラリートーク

7月27日(土)、9月7日(土)

いずれも10時～

▼ギャラリートーク

好評開催中～8月26日(月)

「出雲の赤

―縄文・弥生時代編―

●ギャラリートーク

7月21日(日)、8月18日(日)

いずれも10時～

▼速報展

好評開催中～9月30日(月)

「よみがえる鰐淵寺の建造物

―釈迦堂の修理成果から―

▼スポット展

8月7日(水)～9月9日(月)

「いつまでも戦後で

ありたい2019

▼ギャラリートーク

8月28日(水)～11月25日(月)

「没後180年 西山砂保

―出雲の近代医学の先駆け―(仮)

※右の展示は、いずれも観覧料、参加料ともに無料です。

★講座のご案内

▼出雲弥生の森博物館 職員リレー講座

出雲の文化財や歴史、最新の発掘成果について、出雲市文化財課の職員がわかりやすく解説します。

8月3日(土)

「解説いすもの登録文化財」

【講師】 景山このみ

8月24日(土)

「出雲における

弥生・古墳時代の埋葬儀礼」

【講師】 坂本豊治

館長講座

今回は「モノから歴史をひも解く」シリーズをお送りします。

9月28日(土)

「戦争記念物から

出雲の近代史をひも解く」

【講師】 花谷 浩

右の講座はいずれも

●時間 14時～16時

●受講料 各回300円

●定員 80名

※講座の受講には、事前申込みが必要

です。電話・FAX・博物館ホームページでお申込みください。

岡山県津山市に桜で有名な津山城跡がある。その大手道をはさんで風変わりな博物館が2つ並んでいる。一つは森本慶三記念館、旧津山基督教図書館の建物(1926年竣工)に開設された歴史民俗館だ。第1室には津山城下町の豪商「錦屋」の店先が再現される。第2室はもと礼拝室で、津山基督教会の蔵書などが並べてある。不思議な組み合わせと思いきや、津山で教会を立ち上げこの建物を建てた人物が、元「錦屋」店主の森本慶三(1875―1964)だから無理もない。

展示説明によると、森本家は多田源氏の流れを汲み、1586年、加藤清正に従い肥後熊本入りした森本儀太夫一久と右近太夫一房は、この家の先祖という。「森本右近太夫」の名には聞き覚えが、いや、見覚えがあった。

戦国時代、対外貿易のため東南アジア各地を日本人が行き来していたころ、カンボジアのアンコール・ワットは、釈迦が開いた祇園精舎の遺跡と考えられていた。森本右近太夫もそれを信じて、寛永9(1632)年正月にここを訪問し、4体の仏像を奉つて父母や先祖の安

寧と菩提を祈る一文を書きつけた。この墨書を調査した。20年前の記憶が鮮やかによみがえった。

もう一つの、つやま自然のふしぎ館は、教会図書館附属の寄宿舎を改装した「津山科学教育博物館」(1963年開館)に始まる。これも森本慶三が、内村鑑三の「汝の財産を神に献げよ」という言葉に従って創設した施設だ。2万点を越える動物剥製や鉱物標本などの展示は圧巻。そして、第2室「人体の神秘」の展示物には、遺言によって標本とされた森本本人の臓器が含まれる。これには仰天。医学系博物館以外での臓器展示は聞いたことがない。

先人の思いが込められた博物館にはふしぎな魅力があった。

(花谷 浩)

★館長古来夢

岡山県津山市に桜で有名な津山城跡がある。その大手道をはさんで風変わりな博物館が2つ並んでいる。

一つは森本慶三記念館、旧津山基督教図書館の建物(1926年竣工)に開設された歴史民俗館だ。第1室には津山城下町の豪商「錦屋」の店先が再現される。第2室はもと礼拝室で、津山基督教会の蔵書などが並べてある。不思議な組み合わせと思いきや、津山で教会を立ち上げこの建物を建てた人物が、元「錦屋」店主の森本慶三(1875―1964)だから無理もない。

展示説明によると、森本家は多田源氏の流れを汲み、1586年、加藤清正に従い肥後熊本入りした森本儀太夫一久と右近太夫一房は、この家の先祖という。「森本右近太夫」の名には聞き覚えが、いや、見覚えがあった。

戦国時代、対外貿易のため東南アジア各地を日本人が行き来していたころ、カンボジアのアンコール・ワットは、釈迦が開いた祇園精舎の遺跡と考えられていた。森本右近太夫もそれを信じて、寛永9(1632)年正月にここを訪問し、4体の仏像を奉つて父母や先祖の安

寧と菩提を祈る一文を書きつけた。この墨書を調査した。20年前の記憶が鮮やかによみがえった。

もう一つの、つやま自然のふしぎ館は、教会図書館附属の寄宿舎を改装した「津山科学教育博物館」(1963年開館)に始まる。これも森本慶三が、内村鑑三の「汝の財産を神に献げよ」という言葉に従って創設した施設だ。2万点を越える動物剥製や鉱物標本などの展示は圧巻。そして、第2室「人体の神秘」の展示物には、遺言によって標本とされた森本本人の臓器が含まれる。これには仰天。医学系博物館以外での臓器展示は聞いたことがない。

先人の思いが込められた博物館にはふしぎな魅力があった。

(花谷 浩)

(発行) 出雲弥生の森博物館

2019年7月

〒693-0011
島根県出雲市大津町2760
(TEL) 0853-25-1841
(FAX) 0853-21-6617
(E-mail) yayoi@city.izumo.shimane.jp
http://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori

- 入館料 / 無料
- 開館時間 / 9:00～17:00 (入館は16:30まで)
- 休館日 / 火曜日 (祝日の場合は翌平日) 年末年始

